

ロシアによる中東問題の打開——不機嫌なワシントン

【訳者注】現在の米露の対立とは何だろうか？ それはイデオロギーや国の利益の対立ではない。ウソをつく墮落した者と、事実を話す誠実な者の対立である。どちらが尊敬に値し、どちらが軽蔑に値するか、その区別がいよいよはっきりしてきて、誰も騙されなくなったと、この論文は分析している。軍事力は究極的に、道徳的判断の前には無力となる、またなすべきである。これを読むと、世界がその方向へ向かっているという希望をもたせる。

これはロシアがもたらした明るい方向転換である。困惑した墮落勢力は、そのロシアを憎み軽蔑するように、躍起になって世界を誘導しようとする。なぜ、我々はそれに乗り、これがかつての米ソの覇権問題か何かのように考えて、この世界滅亡の危機を前にして黙っているのか？ カニンガムが言うように、世界は、親米国も含めて、嘘つきともうこれ以上付き合うことができなくなった。ロシア機を撃墜し、テロリストの便宜を図り続けたトルコのエルドアン大統領ですら、180度の転回によって、ロシア支持の態度を示した。

究極的に人を動かすのは誠実さであり、力ではないことが証明されつつある。

Finnian Cunningham

August 19, 2016, Information Clearing House, [RT](#)

<https://www.rt.com/op-edge/356454-russia-isis-iran-us-airbase/>



今週、ロシアの行ったイラン領内からのシリアへの空襲は、当惑と落胆の混じった思いでワシントンに受けとめられた。もっともなことである。それはロシアの中東における立場の、一つの画期的な進展であった。

ロシアは、イラン、イラク、シリアを含む、4か国との緊密な連携によって行動している。ここにレバノンを加えてもよい。なぜなら、ロシアはシリアのヒズボラ地上軍と協力しているからで、ヒズボラはバイルートにおける支配的な協力パートナーの一つだからである。

ワシントンのパートナーと考えられていた中東の国々でさえ、ロシアと、プーチン大統領の示すリーダーシップに対する、新たな評価を示しつつある。特に——アンカラ政府が米国在住の聖職者の仕掛けたものだとする、失敗したクーデタの後で——トルコとロシア間に起

こった和解的な動きは、地域的な地政学における地殻変動的な意味をもつ。

ビデオ——「ロシアの Tu-22M3 “バックファイア” 長距離爆撃機が、イランの基地から ISIS を狙う」 https://twitter.com/RT_com/status/765467183635890176
——RT (@RT_com) August 16, 2016

シリアについて深い違いはあるものの、ロシアは、普通ならアメリカの保護国で、シリアにおけるモスクワの同盟国の敵と目される他の国家との、親密な関係を築くのに成功している。プーチンは過去一年間、イスラエル首相ベンヤミン・ネタニヤフを温かく迎え、またサウジの指導者たちをモスクワで丁重にもてなしている。ロシアの外相セルゲイ・ラヴロフは、最近、ペルシャ湾のカタールの首都ドーハで、中東紛争の解決のハイレベルの話をするように招かれた。 <http://tass.ru/en/world/812305>

ロシアに対するこの各方面からの敬意と、アメリカのますますひどくなる評判を比べてみるがよい。何十年にも及ぶ米主導の破壊的戦争、失敗に終わった国家造りや、政権交代の謀略といったものが、ワシントンのこの地域での立場を、そのパートナーとされている者たち間でさえ、低下させてしまった。個人的にも公的にも、イスラエルやサウジやトルコの人々は、同盟国としての公的な表明にもかかわらず、アメリカの庇護国に対する軽蔑を抱き始めているように見える。

ロシアの長距離 Tu-22M3 爆撃機が、今週、イラン西部から飛び立ってシリアでの任務を行ったとき、それは、何十年もアメリカが握っていると考えられていたこの地域で、初めて、モスクワが主役に躍り出たことを意味するものだった。

イラン・イスラム共和国が、1979年の革命以来、初めて、憲法に前例のない条項を設けて、軍事的目的のために、外国の軍隊にその領土を使うことを許可することにした事実は、この敏感な地域での、ロシアの支配の証拠である。 <https://www.yahoo.com/news/iran-official-no-permanent-russia-syria-strikes-080045082.html>

イランの公的な敵——イスラエルとサウジアラビア——でさえ、その意味を認めざるを得ないでいる。イランは、何十年もの西側の課する制裁を、その主権的権利の原則から糾弾してきたが、ロシア軍に対しては、領土へのアクセスを信頼して認めようとしているのである。

これは国際的な諸関係を実施するに際しての、ロシアの誠実さを計る目安と考えられるだろう。これは二枚舌や裏切りを常習としているワシントンとは大違いで、その最も固い同盟者とされる者たちでさえ、あまりにもよく知っている。要するに、ワシントンは“信頼でき

ない”相手なのである。

一方、ロシアは——シリアやイランのようなその同盟国について、いくつかの国家がどう考えようと関係なく——その約束を誠実に守る者と考えられる。

ウラジミール・プーチンが、昨年9月末、ロシアのシリアへの軍事介入を命じる前までは、バシヤール・アサド大統領の政府は、危険な状態にあった。暴徒や、外国の支援を受けた軍団が、政権転覆を目的とする外国勢力の意を受けて、アサドを倒そうとしていた。支援するのは、ワシントンとその同盟軍 NATO、イギリス、フランス、またその地域のパートナーであるトルコ、サウジアラビア、カタール、イスラエルであった。

ロシアの長年の盟友であるダマスカス政府を援護して行った、プーチンの大胆な介入は、完全に戦争の潮流を逆転させた。一年も経たぬうちに、シリアはその領土の多くを奪還し、現在、敗北に直面しているのは、外国の支援を受けた軍団である。

かつてはシリアの反乱軍の絶対の支援者だったトルコの、最近の 180 度の転回は、シリアの紛争を解決するために、ロシアとイランに協力しようというものだが、これは政権交代のための隠れた戦争がほとんど終わったということ、暗黙のうちに認めるものである。そしてその結果を達成したのはロシア軍である。

今月初めのニューヨーク・タイムズ報道は、シリアにおけるロシアの戦略的成功の評価について、正直に書いていた。

http://www.nytimes.com/2016/08/07/world/middleeast/military-syria-putin-us-proxy-war.html?_r=4

より広い地政学的な諸問題に触れて、この新聞は社説にこう述べている——

1980年代のアフガニスタン以来、初めて、過去1年間のロシア軍は、CIAによって訓練され補給された反乱軍勢力と直接の戦闘状態にあった。アメリカに補給されたアフガンの戦闘家たちは、あの冷戦時代の戦闘には勝利した。しかしこの度は、結果は——これまでのところ——前とは異なっている。

「イランの基地からの、ロシアの対 ISIS 空爆は、西側に欠けている模範的な協力を示している」 <https://t.co/NKb1JnCayq> ——RT (@RT_com) August 16, 2016

NY タイムズはこう付け加えた——

ロシアの、シリアにおける戦闘での成功は、クリミア併合（ママ）とウクライナへの他の侵入以後、西側から孤立していたモスクワに、中東の将来の決定について、新しい支配力をもたせるに至った。

これこそ、ロシアの、シリア戦争でのイランとの画期的な軍事協力に対する、ワシントンの反応が、不気味なほどの落胆を見せている原因である。

米務省は、ロシア空軍のシリアにおける、このより強力な展開を“不幸なこと”と表現し、ロシア、イラン、イラク、およびシリアの間の連携の強化を、アサド政権を支える“危険の倍増”だとして非難した。

ロシアは、彼らがイランとイラクの上空を通過して、シリアへ向かう際の“衝突回避処置”（deconfliction procedure）として、アメリカにこれを通告した。しかし、ロシアがワシントンに相談するつもりがないことは明らかだった。モスクワは、この計画をすでに決定しており、ワシントンの心配などとは無関係に前進しようとしていた。

ロシア - イランの動きについてのアメリカの不安は、目に見えて明らかだった。最初、ワシントンは、ロシア軍の飛行は、国連安保理の“戦闘航空機をイランへ供給し、売り、移送することを禁ずる決議に抵触すると主張して、法的正当性を問題にしようとした。

しかし、ロシア外相セルゲイ・ラヴロフが指摘したように、この取り決めはそういうものとは関係がなかった。

「これらの軍用航空機は、イランの承認するところによって、シリアにおける対テロリスト作戦に参加するために、空軍によって用いられるもので、それは、相手政府からの合法的な要請によるものである」と彼は水曜日、説明した。

するとワシントンは、見え見えの言葉のあやによって、Deir ez-Zor、Aleppo、Idrib へのロシアの空爆は“穏健派反政府軍”を攻撃しているとして反対した。務省報道官マーク・トナーは、ロシアの標的は、イスラム国や Jabhat Fateh al-Sham（改称アルヌスラ）に属する過激派ではなくて、アメリカの支持する“顕著に穏健な”反乱軍なのだ、と記者団に保証した。<http://www.state.gov/r/pa/prs/dpb/2016/08/261082.htm>

ところが奇妙なことに、ロシアの作戦についての記者会談の応答の中で、シリア・イラク担当の報道官 Chris Carver 大佐は、危険視されたテロ集団が、標的となった領域のどこにい

るか知らないと言った。<http://www.voanews.com/a/russian-warplanes-use-iranian-airbase-to-stage-syrian-airstrikes/3467078.html>

だとすると、国務省はロシアが攻撃していたのは“穏健派”だと知っているが、ペンタゴン（国防総省）は“テロリスト”がどこにいるか知らないという、おかしいことになる。

ロシアは、シリアで、大多数のシリア人民の支持を得て、主権をもつ政府のために戦って、勝利しているが、ワシントンは、テロリスト代理兵と結託し、ダブル・トークとダブル思考によって、リスクを倍増していると思われる。

「イランの援助する、イラクのシーア派勢力は現在 10 万と推定される——米軍報道官」
<https://t.co/T2Q3eYpuKu>——RT(@RT_com) August 17, 2016

ワシントンが戦略的に重要な地域で、すべての信用を失いつつあるのは、彼らが犯罪的計画と二枚舌にあまりにも長く依存してきたからである。伝統的なパートナーや保護国でさえ、汚らしいアメリカの行動の、非道徳なやり方を見逃したりしない。節操のない、信頼できないアメリカの権力は、恐れないとしても、軽蔑すべき何ものかである。

ロシアはその同盟国に忠実であった。そしてシリアが証言するように、彼らが約束した使命を実行した——そこに嘘も謀略もなかった。その誠実さは、同盟国、非同盟国、そして敵の間でも同じく、確実に尊敬に値する。（強調訳者）

あまりにも長い間、ロシアは、アメリカ人が中東を、アフガニスタンからイラク、リビアからシリアへと、戦争と転覆によって切り刻み、痛めつけるのを目撃してきた。この度シリアは、ワシントンの中東での略奪行為の、歴史的転換点を画するものとなった。

そしてロシアは、考慮に入れるべき深刻な均衡勢力として現れてきた——幸いにも。